

栄光の江名港、望郷

坂本榮

江名港は

その昔

玉砂利の小さい浜で

楽しみを大切にする

江名町民の湯浴み場所であった

泳ぎを覚え始めた小学校四年の頃であろうか

夏休みに祖母の家に長逗留し

目前の浜で湯浴み

六年の兄者から離れるなど強く言われたが

泳ぎを

憶え始めの一番危険な時期

砂利に足を取られ上半身でモガク

救助の兄者にしがみ付き、危機一髪

フンドシ外し救助してくれた兄者

家から飛び出してきた祖母

兄者は家の名前を名乗り家路に

質屋の孫と知る故に

婆ちゃんは菓子折り片手に兄者の家に急ぐ

父ちゃんが北洋から帰ったとき以来の馳走を楽しむ兄者

明治・大正の御代、正月明けの浜に北町、辻町、南町ごとに

周囲を大漁旗などで覆われた異様な小屋が建つ

曰く、トリ小屋

六年生は大将役

低学年は正月に残った餅と薪集め役

若水男の五年生はフンドシ締め込み

寒中海に跳び込み諏訪神社に奉納大漁・豊作を祈願

正月十五日には太鼓を叩き正月の歌を歌い酒代クンツアンシヨ、と酒代をせびり叫び声で船主や船頭の有力者の家に土足で上り込む

子供の悪ふざけだが

正月の神様は靈験新たかだと、板子一枚下は地獄と知る漁師は許す包容力あり

古来、江名浜に魯漕ぎの伝統の伝馬船を上げ、沿岸漁業で柳カレイ、アカジ、目光を

水揚げ

直接外洋に面した浜は時化で家屋ばかりか尊い人命も奪う魚種がサンマ、カツオの近海に変わると

中田政吉翁が有力船主と協議し北磯と南磯をまたぎ堤防設置、浚渫築港し大型船の入港を可能に

イワシの水揚げ増えると

幕府の年貢米積み出し港だった町内の隣港、中之作港を加え、長崎、八戸や銚子と並ぶ水揚げ千五百トンになる

昭和初期百軒の船主は昭和三十年に最大二百軒に

その後、日水、日進、日露、マルハ

中央の母船団の独航船として大漁旗万艦に軍艦マーチ高らかに父親を見送る小学生の子供たちのテープに見送られ北海道沖の北洋へ

盆に新巻鮭と筋子を持って帰港

網補修し集魚灯万艦に秋の秋刀魚に備える

近隣の中学校卒男子は漁船員に

女子はお手伝いに

本町通りはバスがヒシメキ、

江名港最大の繁栄、多数の船主、第二十四福吉丸を筆頭に複数船腹所有の船主が多く

旺盛な資金需要に対応し地銀出店地銀、七十七、東邦、常陽支店が軒を並べる

ロシア、カナダ経済水域主張で

漁獲高減少し、魚値高騰で日本人の魚離れで衰退の一路

東日本大震災の大津波は船着場前中田政吉翁銅像周囲海水巡る画像放映

嗚呼、栄光の江名港よ、いずくんぞ